

Huawen / Zhongwen: The “Aphasic South” and the Reconstruction of Language (Part 2)

Ng Kim Chew Translated by JIA Haitao

Abstract

This paper, “Huawen / Zhongwen: The ‘Aphasic South’ and the Reconstruction of Language” by Ng Kim Chew (translated by Jia Haitao), examines the unique linguistic challenges and identity issues confronting Malaysian Chinese (Mahua) literature. The author establishes a distinction between “華文” (Huawen), the localized and hybrid written language of the Malaysian Chinese diaspora, and “中文” (Zhongwen), the standard, culturally coded language of Chinese Mainland and Taiwan.

The essay first identifies several factors that have historically constrained the development of a rich literary Huawen: a legacy of dogmatic realism that treats language as a mere tool; the inherent difficulty of representing a multilingual oral reality composed of Southern Chinese dialects, Malay, and English; and a decline in cultural literacy that severs the language from its classical roots. In response to this linguistic environment, some diasporic writers, exemplified by Li Yongping, have pursued a return to a “pure” Zhongwen as a conscious process of cultural identification with traditional China. However, the author argues that this is not the only path forward.

Drawing on an analysis by mainland novelist Wang Anyi, the paper posits that writers from the “South” (including Mahua and Southern China) are in a state of “aphasia” (失語). Unlike their Northern counterparts, whose vernaculars form the basis of the standard written language, they lack a “natural” writable language and must “translate” their experience, resulting in a more consciously “technicized” form of writing. The paper concludes that the challenge for Mahua literature is not an excess of this technical construction but a lack thereof. The future lies in embracing this condition and actively reconstructing a unique, modern

Huawen that reflects its complex reality, rather than retreating into classical Zhongwen.

Owing to space limitations, this paper is published in two parts. The first two sections appeared in the previous issue; the third section is included in this issue.

華文／中文： 「失語の南方」と言語の再構築（後編）

黄錦樹・作 賈海濤・訳

「訳凡例」

・ 原題「失語的南方」は、「失語の南方」と訳出した。通常、「失語」という言葉は、日本語でも中国語でも、言語機能の障害である「失語症」を指す。しかし、本稿においては比喩的に用いられており、政治的・文化的抑圧や言語政策などによって、自らの母語や地域言語の使用が制限され、あたかも生まれながらの言葉を失ったかのような状況を指す。

この「失語」および「失語の南方」という概念に関するより詳細な解説は、稿を改めて論じる予定である。

・ 原文のキーワードである「馬華文学」「馬華作家」といった「馬華」を冠する一連の用語は、原則として「馬華〇〇」といった漢字表記のまま訳出した。その理由は以下の通りである。

- ① 先行研究においても漢字表記とカタカナ表記（例：マレーシア華人）が併存しており、定訳が確立していないためである。
- ② 「馬華」の「華」は文脈によって「華人」（エスニシティ）や「華文」（言語・文学）などを指すが、訳文の簡潔さと用語の包括性を考慮し、漢字表記に統一した。

ただし、原文の「大馬華人」のように、文脈上明らかにエスニシティとしての「華人」を指す場合は「マレーシア華人」と訳出した。

- ・原文では、「中国語」に相当する表現は「華語」「中文」「国語」「漢語」などが、それぞれ異なるニュアンスで使い分けられている。そのため、本稿では原則として、これらの表記をそのまま訳出した。
- ・原文の尾注と区別するため、訳者による注釈（訳注）は、被注箇所直後に（*）の記号を付して示した。
- ・原文の注において、書誌情報が不完全なものは、原文に従って記した。
- ・紙幅の都合により、本稿は前後編に分け、前号は第一・第二節、今号で第三節を掲載する。

三、失語の南方：「中文から華文へ」

これまでの二節で考察した範囲は、いずれも中国大陸の外、すなわち「外華」³⁹⁾の存在状況における問題に限られていた。しかし、華文であれ中文であれ、それらは文学言語として、より大きく複雑な比較対象である中国大陸における「中文」と、特に1980年代以降の文学実践と向き合わなければならない。両者の詳細な比較は極めて困難であるが、有効なアプローチが一つ存在する。

それは、中国を代表する小説家の一人である王安憶の見解を参照することである。なぜなら、王は1991年にシンガポールとマレーシアを訪問し、巡回講座に参加し、現地の作家や団体と広く交流した後、示唆に富む長編の観察報告を発表した経験を持つからだ。さらに、大陸と台湾の小説言語を比較した文章も著しており、その思考の軌跡は本稿の論理展開とまさしく合致する。

王は、エッセイ「語言の命運」の中で、シンガポールとマレーシアの言

39) 「外華」という概念については、王慶武『中国与海外華人』（1994）を参照されたい。この言葉は、端的に言えば「海外華人」の縮称である。しかし、それが内包する語義はより豊かである。なぜなら、「外華」の「外」という文字が、動詞的な機能をも兼ね備えているからである。

語状況を省察している。中国大陸の出身という外部の者として、また、華語がかの地のような存亡の危機に瀕していないという立場から、王は比較的客観的な視点に立ち、次のように率直な指摘を行う。

シンガポールの問題は、華語を話すか話さないかではなく、完全な言語を一つ持つ必要があるという問題なのである。⁴⁰⁾

王の説明によれば、いわゆる「完全な言語」（「徹底的に純粋な言語」とも呼ばれる）とは、単に道具的・機能的であるだけでなく、文化的・情感的な深みをも備えていなければならない。これは選択の問題であり、漢語（*漢民族の言語という意味での「中国語」）の優先を前提としないため、英語も同様にこの目的を達成しようという。この見解は、現地の華文ナショナリストにとっては大きな衝撃であろう⁴¹⁾。

王は続けて、シンガポールが「国際社会と共存する経済生活に参加していくことは、民族的源流の記憶を犠牲にすることを代価とする」とも指摘する。それは歴史的な事実であり、単なる代価ではなく、むしろ国際社会に参入し、急速に現代化を達成するための「条件」の一つであったとさえ言える。その結果、「人々がどのような言語を話そうとも、彼らの生活上の立場には何の影響もない」ことになり、「華人は平然と他民族の言語を話す」のである。これらの文化的な重荷を負う必要のない華人にとって、「漢語はもはや現実の生存と直結するものではなく、せいぜい情感的に結びつくにとどまる」。このような言語状況の下で、彼らが漢語を学ぶとき、それは一種の外国語として学ばれているのである（詳細は後述）。

マレーシアの場合、言語をめぐる状況は一変する。王は、ジョホール州

40) 王安憶「語言的命運」(上)。

41) 注40の引用文章における張曦娜の反応を参照。

の州都ジョホールバルで受けた印象を、含意に富む文章で描いている。「商店が林立するその街並みは、香港や広州のようでもあり、看板には大きな中文と小さなマレー語の文字が記されている」⁴²⁾。王を出迎えた地方紙『星洲日報』の同僚は、「濃厚な郷土の気風をまとい、あたかも中国南部の山地から出てきたばかりのような」人々であった。さらに王は「真の農夫のように言葉少なで、誠実な人柄であった」と述べ、「素朴で誠実、歌うように華語を話すマレーシア華人」と語っている。

この文章は、極めて情緒的な語り口で、相応の紙幅を割いて、マレーシア華人の文化的情感と、華語への複雑な愛着を描き出している。注目すべきは、王が明らかにした二点である。(1) 華人の漢語／華文に対する情感的価値、(2) その情感的価値に加え、漢語／華文がマレーシアという国家における華人の地位を象徴する価値をも有していることである。王はまた、おそらく国家のエスニック差別構造が、かえってマレーシア華人にとって言語の存続を支える情感的な空間を与えているのではないかと示唆する。

しかも、そのような空間はシンガポールの場合と異なり、なお十分に検証されていない。すなわち、もし華人が国家の主となった場合、「言語というエスニシティの標識を、今なおそれほど気にかけるだろうか」という問いである。この問いには、王の深い思弁が込められている。(1) 情感的価値のほかに、言語はマレーシア華人が政治的地位を勝ち取るための単なる戦略なのか、あるいは象徴的な戦場にすぎないのか。(2) シンガポール華人の「成功」は、マレーシア華人および華文の方向性を示唆するのか。

同様に興味深いのは、王がマレーシア華人の生活空間を中国南方の農村部になぞらえ、そこで暮らす人々が「口下手で、人に対して誠実で篤実である」ことを強調する一方で、馬華文学や新聞記事の華文といった書面語

42) 王安憶、「語言的命運」(下)。

については一切言及していない点である。この文章は完全に口頭語に着目しており、書面語については沈黙を保っている。この沈黙には、いかなる判断が留保されているのだろうか。

情緒的な叙述とは裏腹に、王がシンガポール・マレーシア両地域の華人の「言語の運命」を分析する際に依拠しているのは、実は共通の理性的基準（情感的価値／生存上の立場／近代化）である。したがって、両地域の華文に触れる際にも、同じ判断基準を適用したであろうと考えるのが自然である。事実、シンガポールでのある言語ゲームについて、王は率直な感想を記している。

正直に言えば、彼らが書く文章は大したものではなく、表現はぎこちない。漢語の語彙が乏しく、文法に手足を縛られていることに私は気づいた。⁴³⁾

王は、この判断が主に「英語教育を受け、漢語を話せない」世代を対象としたものだとして補足説明している。しかし、大部分が漢語を話せるマレーシア華人についてはどうであろうか。王は「口下手」と評するにとどまり、華人の文章力への踏み込んだ言及は避けている。

ある言語学者の指摘によれば、言語学習が文法を通じて行われる場合、たとえそれがエスニシティ的な母語であっても、その言語は実質的に外国語と化す⁴⁴⁾。シンガポールの状況がこれに当てはまるとすれば、現在のマレーシアにおける華文教育が文法を過度に強調している現状も、また同

43) この言語ゲームに関する王安憶の叙述は、注40で述べたように非常に注目に値するものであり、王が言語に対して並外れた感受性を有していることが見て取れる。

44) ノーム・チョムスキーが自身の文法理論を構築する際に用いた判断基準は、まさしく「母語話者の語感」であった（ジュディス・グリーン『瓊斯基』、22頁）。この直観（語感）を持たない外国語の学習は、必然的に文法規則から入らざるを得ない。この文脈において、王安憶は「母語話者」の立場から、自らの語感を基準として発言しているのである。

様ではないだろうか。語彙の源泉たる古典や文学作品を深く学ぶには豊かな教育環境が不可欠であるが、シンガポールとマレーシアはその条件に恵まれているとは言い難い。王がマレーシアの書面語について留保したその判断は、大陸と台湾の小説言語の比較を通して、その一端をうかがい知ることができる。そしてそれは、本稿が目指す「華文」と国内外の「中文」との差異を比較考察する上で、格好の機会となる。

論考「大陸台湾小説言語比較」⁴⁵⁾において、王は自身および李銳（大陸の重要な前衛的郷土小説家）の作品と、台湾の宋澤萊⁴⁶⁾の作品を比較している。議論の便宜のため、以下、王の文章の要点を箇条書きで示し、解説を交えながら論を進める。

1. 口語化／技術化

王は文章の冒頭で、以下のように明確な対比を提示している。「大陸の小説言語は口語化しており、この口語は極めて強い地域的特徴を帯びているため、より一層、方言化・俗語化している。一方、台湾の小説言語は漢語の技術化、すなわち書面化である」。前者（口語化）が特に北方の農民の語り口に由来する形象性（具体的なイメージを喚起する力）を際立たせるのに対し、後者（技術化）は語彙の抽象性という特徴を持つ。以降の議論は、すべてこの基本的な対立軸に沿って展開される。

2. 技術性／文化性

宋を例にとれば、言語の技術化（書面化）は多様な修辭的手段を伴う。常用漢字・語彙の非慣用的な使用や、古語への新義の付与といった、不断

45) 『上海文学』、1990年3月号に発表。

46) 宋澤萊は、現代台湾における重要な作家の一人であり、極めてモダニズム的な長編と多数の郷土小説を執筆しており、モダニズムの洗礼を受けつつ、変容する農村社会における小人物の精神的様相を描写した。王安憶が比較の代表例として宋を選んだのは、非常に的確であると言える。

の更新が見られる。「これは実に、漢語の語義の内容と形式を拡張・変容させるものであり、漢語そのものが持つ内実を深く掘り起こす試みである。」

これに対し、大陸小説における口語化は、「方言・俗語を言語的手段として取り込む一方、その背後で、具体的な使用場面において獲得された特定の文化的内実を活用し、言語の文化的背景を強調するものである」。王はその例として、「北方のある農村では、乳房と乳汁をすべて『媽媽（お母さん）』と呼ぶ」ことを挙げる。このような用法自体が、豊かで特殊な文化的含意を持っているのである。

3. 対象性／メタ性

王は大陸と台湾の小説における言語と現実の関係について次のように述べている。「大陸作家の小説は、往々にして言語を透明化し、場面と人物像を直接に提示する。他方、台湾作家の小説は、言語による創造という小説本来の意味に忠実であり、読者に手渡されるのはあくまで文字と言語である。そして、それらの文字・言語がどのような場面・物語・人物像を構築しているかは、読者の解釈に委ねられるのである。」

さらに王は、前者には「画面感」（* 視覚的なイメージを喚起する力）が、後者には「読書感」（* 言語を読み解く感覚）を備わると補足する。言語と現実の関係から言えば、前者は現実を直接的に再現しようとする志向が強く対象提示的であるのに対し、後者は文学言語によって現実を再コード化するため、相対的にメタ的（* 言語自体を意識させる性質を持つ）・説明的であると言えよう。

4. 会話における文法

王は「会話であっても強い叙述性が存在し、口語でありながらも高度に

書面化されている」と台湾小説における会話文の特異性を指摘し、これを裏づける具体例を示す。「すべて書面語として整序され、文法的にも述語・目的語が適切に配置された、極めて規範的で流暢な漢語である」と述べる。

中でも第四点は極めて重要である。王の指摘するところによれば、台湾小説では会話においてさえ厳格な文法が守られ、叙述・描写や議論においてはなおさらである。台湾の「技術化」された言語がその文法構造を意識させるのに対し、大陸の小説言語は会話的であるため、文法はむしろ顕在化しにくい。その結果、後者は「親しみやすく自然だ」⁴⁷⁾という印象を与える。第二点、すなわち語彙の問題も看過できない。ここで言う「漢語自身の内実」とは、語が本来持つ書記上の意味を指し、民間口語における再創造の産物ではない。この第二点と第四点が相まって、台湾の小説言語における「技術化」ないし「書面化」の性格が形づくられている。

王の分析を要約すれば、大陸の小説は相対的に「言文合一」に近く、台湾の小説は「言文分離」の状態にあると言える。さらに、このような言語的特徴を備えた台湾小説からは、常に傍観者としての知識人とその「知識人めいた口調」が読み取れると指摘する。というのも、そこで用いられる「言語様式」はことごとく作者自身のものであり（描かれる対象のものではなく）、結果として「文人らしいエッセイ風の書き方」や「文化人の視点と言語による農民生活の表象」へと回収されるからである。このような言語の使い手は、自らの「言語面における教養、学識、鍛錬」を誇示しているかのように見える。つまり、言語使用において専門性を顕示しているのである。では、なぜこのような現象が生じるのか。なぜ大陸と台湾の小説言語にこれほどの差異が生まれるのか。なぜ台湾における創作は、これ

47) 注45の引用文に同じ。王安憶が陳映真の言葉を引用している。

ほどまでに「知識人的」に見えるのか。

その答えは、実のところ単純である。台湾・シンガポール・マレーシア・および中国南方の諸地域は、歴史的に書面化の経験に乏しい方言圏に属し、長らく国家の公式書記体系の外部に置かれてきたからである。北方方言は「普通話」と同系統に属するため、豊かな口語表現が長い歴史の中で育まれた基盤に支えられている。口語にも容易に対応する文字が見いだされ、文型も既存の枠組みにのせるため、書記言語として「自然化」されやすいのである。他方、南方方言（閩・粵・潮・瓊など）の書面化の歴史は短い。その端緒は、五四新文化運動による白話文「復権」および、台湾やシンガポール、マレーシアが近代的政治体制として成立する過程で独自の文学的表現が要請されたことによって、ようやく開かれたにすぎない。

しかし、白話や華語といった口語の参照対象は依然として北方方言であり、最も豊富で便利な言語資源もまた北方に集中している⁴⁸⁾。中国域外の南方系華人にとって、創作時に直面するのは、内容に乏しく不自然な標準書面語と、書記化の難しい自らの方言（および他民族の言語）という二重の困難である⁴⁹⁾。ここにおいて、書くという行為はすなわち翻訳という行為となる。北方の作家にして読者でもある王にとって、その成果物がごちなく、生硬に映るのは避けがたい。だからこそ、王は次のように述

48) 王安憶は大陸の農村言語が持つ歴史的な豊かさを次のように称揚している。

中国の農耕史は世界で最も長い。したがって中国の農民は世界で最も長い歴史を持つ農民である。中国農民の言語は、最も豊かな歴史的蓄積と、最も整った文字体系を内包している。書記言語は、農民の言語の前では、貧弱で味気ないものとならざるを得ない。

中国は地域が広大で、長らく交通が不便であり、文明の発展段階も各地で異なり、民族融合の様相も極めて複雑で、文化は多彩である。この多様性が言語に反映すると、各地に固有の慣用語、方言、俗語、さまざまな歇後語が生まれた。これらの言語は各地方の歴史と社会の発展状況、さらに人生観、世界観をも含み、まことに妙趣に富む。(1990、8頁)

知識青年にして尋根派の小説家として、王はマルクス主義の大衆化という要請に応えつつ、民間文化の豊かさ（すなわち歴史の豊かさ）を拠り所にすることで、創作が言語の乏しさに陥ることを防ぎ、また五四期以降の新文芸調を効果的に希釈したのである。

べる。

我々南方の作家が、南方の生活や文化を表現しようとする際、北方語が書面語として規範となっている状況下では、自らの言語を失ってしまうのだ。

(*ここで、本文が王を「北方の作家」と位置づける一方、引用文中で王自身が「南方の作家」と述べている点について補足する。これは一見、矛盾しているように見えるが、両者の視点の差異に起因するものである。マレーシア華人である黄錦樹にとって、上海育ちの王は中国の言語的正統性を代表する「北方」の存在として映る。対照的に、王自身の自己認識においては、上海が地理的・文化的に「南方」に属するという意識が反映されているのであろう。)

南方方言は書面化の経験に乏しく、見慣れない上、解読すら困難である。南方の読者は、規範とされる北方方言をはたして完全に理解できているだろうか。多くの場合、「分かったようで分からない」という生半可な理解にとどまっているのではないか。

真の問題はここにある。直接的に模倣・採録しうる「自然」な言語モデル（北方方言）を欠く以上、「華文」であれ「中文」であれ、言語の「技術」に過度に依存せざるを得なくなる。中国国内の「中文」が持つ先天的な優位は、逆説的ながら大陸の農村部における地理的隔絶と閉鎖的な自足に支えられている。その言語が「自然化」されやすいのは、あたかも近代文明から遠い自然景観のごとく、長い歴史的展開の中で特定の時点を超越

49) 白話文の乏しさは歴史的な事実であり、それは胡適に代表される科学主義者たちが、文言文の弊害を性急に是正しようとして陥った、意図せざる結果でもあった。五四期以降の作家の多くは、いわば「白湯」のような言葉を溶剤として意識的に用い、自らの「ジュース」や「カクテル」を調合する試みを続けてきた。余光中や楊牧はその代表例である。1950年代から60年代の台湾モダニズムも言語の再構築から出発し、1980年代以降の大陸における小説の復興もまた、言語革命を伴った。この点に関する研究は数多く存在する。

しているかのように見えるからである。そこに息づく語彙や表現感性、世界観は、はるか過去のものようであり、ゆえに古雅な趣を帯びる。それは、いにしへの優れた詩や名文が備える普遍性にも通じるのである。

言語の技術に依存せざるを得ないという一点において、「華文」と「中文」は平等である。もはや技術化は不可避であり、それがこれらの言語表現が存在するための条件となっている。そして、マレーシア華文の問題は、技術化の過多ではなく、技術化の不足に帰着する⁵⁰⁾。技術化／書面化には複数の方向があり、「中文」はその一様式にとどまる。「失語の南方」は、書記言語の中心である「中原」地域の辺境に位置するため、自ら言語を創造する必要に迫られる。したがって、そこでの創作活動は、すべてが言語創造的な意味合いを帯びた創作とならざるを得ない。

近代化とそれに伴う外国語との接触は、言語創造に新たな可能性を開く。外国語の文法や文型を参照することにより、新たな社会性の基盤の上に、新たな言語の文化性を展開することが可能となるからである。李永平や大陸の小説言語に代表される「中文」とは対照的に、「中国性」を必ずしも強調しないこうした言語実践を、「外華」という呼称よりも、なお「華文」と呼ぶのが妥当であろう。その特徴は、高度な専門化、ひいては徹底した

50) 筆者はかつて「馬華文学的醞釀期？」と題した論考で、ある問題を提起した。中国詩学の伝統に深く根差した、あるいは北京で生まれ育った作家や学者は北京語を自在に操るがゆえに、ある種の書記言語に対する価値判断を内面化している。そして、その価値判断は、往々にして南方出身の作家にとって不利に働くのである。

京派の小説家である汪曾祺はその一例である。汪は「小説技巧常談」の中で歐陽山の言葉を引用し、広東の青年作家たちに数年間北京に住むよう勧めている。なぜなら、「広東の作家は言語の関門を越えなければならない」からだ（39頁）。この発言の背景には、北京語こそが中国白話の正統であり、価値の中心であるという思想がある。汪の文章が中国の若手作家に向けられていることを考えれば、このような助言はある意味で当然であり、そこには年長者としての自負も見て取れる。

汪はさらにこうも述べている。「北京に来られないなら、書面語や文学作品から学ぶしかないが、それではどうしても一層の隔たりができてしまう」（陳建華主編『汪曾祺文集・文論卷』、40頁）。汪に代表される「神韻」の美学を依り所とする中国人たちから見れば、「不隔（隔たりのないこと）」こそ至上であり、「隔（隔たりのあること）」が一段劣るものとされる。ここでは、当然ながら汪個人を批判することにあるのではなく、馬華作家に対し、このような言語の序列化の問題を軽視すべきではないと注意を促すことにある。

知識人化にある。これは集団的な「失語」から生まれた言語であるがゆえに、王の指摘した大きな特徴、すなわち「平易さの中に古文・文言の含意を発展させる」こと、および「文法上の欧化（例えば倒置、受動態、長い従属節など）」といった性格を色濃く帯びることになる。この文脈において、文法は大陸の「中文」の書き手にとっては自明の前提であるのに対し、「華文」においては言語の物質性として意識的に前景化される。それは、意味を深化・拡張、あるいは変容させるために駆使される語彙と等価の機能を担うのである。

王が「失語の南方」の一つであるマレーシアの「華文」に対して意味深い沈黙を保った事実については、本稿で展開した多角的な考察によって十分に解き明かされたはずである。我々にとって、言語に「運命」はなく、あるのは「遭遇」のみである。すなわち、言語実践を通じてその生を未来へと引き延ばし、無限の可能性へと向かう営為、そのみが存在するのである⁵¹⁾。

1995年1月20日

51) このような可能性は同時に文法によっても保障されており、文法そのものによっても担保されている。母語話者にとって、「言語を構成する文は無数である」（注44引用書、18頁）からだ。それは母語話者が持つ生得的な能力（天賦）なのである。文法の形式が前景化するとき、それは原則として書き手が失語の瀬戸際に近づいていることを意味し、言語的危機に瀕していることの証左となる。余光中・劉紹銘・李永平らが台湾の華文における「悪質な西歐化」を批判する際に着目しているのは、まさしくこのような失語の危機であった。

李は『吉陵春秋』において、文法を意識させないよう試みた（王安憶が指摘した大陸小説の特徴のように）。しかし、その試みは北方方言という盤石な基盤を欠いている。そのため、「失語の南方」に属する李は、結局のところ王文興や七等生らと同様、失語の瀬戸際にモダニズムの発想に依拠し、各自が理想とする「中文／華文」を創造しているにすぎない。皮肉にも、その「失語」の刃の上で、漢語はかつてない多重性が切り開かれたのである。漢語の文法に対し、「母語話者」は選手兼審判と言える。その実践において彼らは文法の周縁を渡り歩き、時には漢語の文法形式そのものを拡張することさえ可能なのである。